

## 環境人文学と文学研究

豊里 真弓

### はじめに

20世紀後半に顕在化した地球規模の環境変化・環境破壊は、私たちの知のあり方の再考を促してきた。文学研究の分野では、1990年代に、文学・文化批評を通して環境問題に関わっていかうとする「エコクリティシズム」（あるいは「環境批評」と呼ばれることもある）という批評ジャンルが登場した<sup>1</sup>。21世紀に入りなお深刻化する環境問題と環境変化に対する危機意識の高まりのなかで、近年、欧米やオーストラリアを中心に、環境人文学（Environmental Humanities）なる領域を拓き自然科学・人文科学などの分野の枠をこえた取り組みを生み出していこうとする動きが生まれている。この新たなフィールド、環境人文学については、『文学から環境を考える—エコクリティシズムガイドブック』（2014年）のなかで、現在のエコクリティシズムを理解するためのキーワードの一つとしてその概要をまとめる機会があった。だが、環境人文学をめぐる動きをどのようにとらえるのかということは、実は、各々が研究者として（あるいは別の立場から）その動きにどう向き合っていくのかを考えることでもある。本稿では、環境人文学の根底にある問題意識に焦点を絞り、環境人文学とエコクリティシズムの動向との接点を明らかにする。それを通して、日本での文学研究が環境をめぐる異文化間対話に貢献しうる一つの可能性—あくまで個人的なスタンスではあるが—について考えてみたい。

---

<sup>1</sup> 「エコクリティシズム」と「環境批評」の定義と特徴、その変遷については、巴山（2014）を参照されたい。

## 環境人文学：地球環境と人間をとらえなおすために

環境人文学とは、概言すれば、人文科学諸分野を土台としつつ、その枠にとられない学際的なアプローチで、「人間と環境の関係、および自然観や環境をめぐる価値観、倫理観を形成してきた文化的、哲学的枠組みを探る研究の総称」である（豊里 275）。スウェーデンの環境研究機関がまとめた報告書によれば、それは「学際的」で「国や文化の境界を越え」、「政策の立案や人々の選択に影響を与えるような価値観や語りの創造に積極的に関わる」（Nye et al. 8）といった特徴を有する研究群である。

研究群、と述べたが、実際、研究テーマとアプローチの多様さゆえにややとらえにくい新領域であり<sup>2</sup>、現時点では社会的認知を得つつある状況であるのも事実だ。その研究も、環境哲学（environmental philosophy）、環境人類学（environmental anthropology）、環境社会学（environmental sociology）をはじめ、「環境人文学という用語が使用される以前から人間と環境をめぐる研究の一拠点となってきた環境史 [environmental history]、また、文化研究の手法を活かし急速に存在感を増すエコクリティシズム [ecocriticism]」（豊里 275）、メディア・スタディーズなど、既存の人文・社会科学分野における環境をテーマとした研究の総称と解されがちであり、また、従来の分野の枠組みでも新たな問題の分析は十分可能であり特段新領域の必要性は感じないという見解もあるかもしれない。そもそも、歴史や哲学の分野で人間と環境の関係を問う動きは目新しいものではないし（Sörlin 788）、それは西欧文化圏に限られた動きでもない。だとすればなおさら、近年、特に 21 世紀に入ってから、欧米やオーストラリア、アジアなどで研究拠点となる機関や学位プログラムが設置され（Nye et al. 参照）、また、その名を冠した学術誌が創刊されるなど<sup>3</sup>、環境人文学が分

<sup>2</sup> 新領域として発展中であり様々なアプローチがあることに加え、例えば、欧米のものに比べオーストラリアの環境人文学では先住民の文化、価値観、思想に目を向ける傾向が強いなど、地域性もやや見られることも、とらえにくさの一因になっている。

<sup>3</sup> *Environmental Humanities* は、無料でアクセスできるオンラインジャーナルである。（<http://environmentalhumanities.org>）

野として急速に発展している背景には何があるのだろうか。

その背景には、何よりも、地球規模の環境変化に対する強い危機意識がある。環境破壊や環境変化が顕在化して以来、科学的な問題分析や解決策の提案・試みがなされてきたのだが、いわゆる環境問題は社会や文化の問題とも複雑に絡み合っており、ある特定の分野だけでさらなる深刻化をくい止める有効な策を見出し実施することは難しいという認識が、分野を越えて共有されてきている。例えば、環境を分析するフィールドとされてきた自然科学分野からも、「文化的価値観や政治的、宗教的思想、根深い行動パターンなどが人々の暮らしや生産、消費をいまだ支配している世界において、〈環境に関する知〉 [environmentally relevant knowledge] の概念も変わらねばならない」という見解が示されるなど (Sörlin 788)、環境問題を考えるうえで人間の社会・文化を考えることの意義が重みを増している。さらに、様々な社会・文化に生きる人々がその生活圏を越えて地球規模の環境危機に対応するためには、従来の分野の垣根を越えた対話とそのような対話を可能にする新たな概念や枠組みが必要だという認識が環境人文学出現の根底にある。D・B・ローズら (Deborah Bird Rose et al.) によれば、環境人文学は「環境の変化が加速する中で、人文科学および社会科学分野の手法を環境問題分析に生かし、意味、価値、責任、目的といった根本的な問いに取り組む」ものである (Rose et al. 1)。言い換えると、環境人文学は、人間および環境の関係とこの地球にどうあるべきかという新たな倫理観を探求し、かつ実践的である—つまり、人間の活動に何らかの変革を促す—ために、知のあり方・枠組みを問い直そうとする、プラグマティックな姿勢を有した動きである。デジタル人文学 (digital humanities) やアートへ広がるその関心の射程も、テクノロジーとメディアを通して人間観や世界観に影響を与え、新たな認識と倫理観を見出し伝達する可能性の模索という観点から理解できるだろう。したがって、新たな研究領域として環境人文学が打ち出されたことの意義は、それにより、サブ・フィールド間の対話や、これまでの学術研究の枠にとらわれない創造的な研究・プロジェクトを積極的に誘う機能が期待できる点にある。

もうひとつ、環境人文学が生まれた背景となっているのが、環境危機にともなう人間観の変化である。特に、近年、環境と人間の関係を考えるうえで重要なキーワードとなっているのが、地質学者 P・クルツツェン（Paul J. Crutzen）らが提唱した「人新世／アントロポセン」（Anthropocene）—ヒトという種の活動が自らを含め地球に存在するその他の種の生存にかかわる地球規模の環境変化を引き起こしている」とされる地質学的時代区分を指し、現代はその時代区分にあるのだという—である。つまり、環境史の分野でも明らかにされているように、人間活動は環境から影響を受けたばかりでなく環境変化の要因でもあったのであり、よって、自然と人間が相互に影響し合うものとしてその関係をとらえ直す作業が進められている。歴史学者 D・チャクラバルティ（Dipesh Chakrabarty）は、アントロポセンという概念によって、「人類」あるいは「種」という視点から歴史をとらえ直す必要が生じており（Thesis 1, 3, 4 参照）、また、特に西洋文化圏における近代的人間観と歴史理解の軸となってきたカテゴリー（例えば「自由」[freedom] のような）が問い直しを迫られていると論じている（206-211）。ローズらも指摘するように、「人新世」であると認めることは、自律と無限の可能性に価値をおいてきた近代的人間像を変えることであり、「環境の中の人間」と「人間の文化や倫理の領域における人間以外の存在（the non-human）」は同時に問い直され、自他の相互作用の中にある人間の主体性と責任の在り方も探求されなくてはならないことになる（Rose et al. 3）。

このように、環境人文学は、変化する環境と人間の関係を理解し危機に対応していくための知の試みといえよう。自然環境と文化の接触領域は時代や社会で異なり、それらは物質的側面のみならず言語や思想、芸術や人工物などの文化的・社会的側面からも構築される産物である（Nye et al. 7）。ゆえに、人間の文化全般、特に意味・モラル・倫理・価値観などを批評の対象としてきた人文分野の研究が、新たな倫理観・価値観・人間観の創造に貢献することが期待されているのだ。「それぞれの文化で人が世界にある在り方の根底にある文化的、哲学的枠組み」を問い直すこと（Rose et al. 5）、そうすることで地球環境と人間の関係をとりえ直すことが目指されている。

環境人文学と文学研究の接点と可能性：  
「グローバル／ローカル」への比較文化的なまなざし

環境破壊への危機意識を背景に生まれたエコクリティシズムは、分野の存在意義や分析対象など、「批評かつ実践の学」(“simultaneous critique and action”) (Rose et al. 3) であることを目指す環境人文学と重なるところは多い。U・ハイザ (Ursula K. Heise) と A・カルース (Allison Carruth) は、今日の環境人文学研究を貫く問題意識の一つとして、「環境保護思想がこれまで積み上げてきた [文化的] 資産のうち、どの概念や語りが環境志向の思想を未来へつなぐことができるのか? また、どんな概念や語りが私たちを時代遅れのテンプレートに縛り付けているのか?」(Heise and Carruth 3) を挙げている。つまり、環境人文学においては、環境問題の多様な側面を考慮し新たな認識をひらくための語彙や概念、語りの枠組みの発掘が重視されているのだが、これはエコクリティシズムに共通の問題意識でもあり、エコクリティシズムがこの点に関して貢献できることは大きいだろう。そのような語彙や概念には、例えば、「スロー・バイオレンス」(slow violence) がある。ポストコロニアリズムと環境保護問題の関係を論じた批評家 R・ニクソン (Rob Nixon) は、この語を用いて長期間に渡って緩やかに進行あるいは継続する環境破壊や環境汚染の事件性・暴力性の認知を促した。また、人間とその他の種の交流あるいは協働に注目し、相互に影響し変化してきたことを浮き彫りにする「異種間の<sup>エスノグラフィ</sup>民族誌」(multispecies ethnography) なるジャンルは、人間と人間でないもののダイナミックな関係を語るための新たな枠組みである (Haraway ; Tsing 参照)。語彙・概念の発掘ばかりでなく、その検証も行われ、もともと環境意識を変えるねらいを含んで打ち出されたアントロポセンという概念を分析する研究もある (Crist 参照)。このように、私たちが自然や環境を語る言葉とフレームを注意深く意識化し、必要があれば積極的に創造していこうという実践的姿勢がある。

ところで、環境人文学とエコクリティシズムに共通して見られる、「グローバル」への志向性と「グローバル／ローカル」に対する姿勢の差異あるいは揺

れに注目してみたい。上述したように、環境人文学もエコクリティシズムも地球規模の環境変化・悪化に対する危機意識を背景に生まれたフィールドであり、いかにそれを意識できる語彙や概念を見出すかを核となる課題の一つとしている。エコクリティシズムの近年の動きと今後の展望を概説したそれぞれの論文のなかで、L・ビュエル（Lawrence Buell）とU・ハイザは、非西欧圏の環境批評の動きにも触れながら、グローバルな環境危機意識と文化的特殊性を同時に認めつつ現存の枠組みをこえていく「惑星思考」（planetarity）の理論の発展を訴えている（Buell 107；Heise “Globality” 641—642）。また、前セクションでみたように、環境人文学も、国や文化の境界にとらわれない対話と問題解決の道筋を探ろうとする特徴があり、国境や文化圏をまたいで存在する環境問題に対峙するという目的からその方向性も一見、国を地球に拡大したもののようにみえる。だが、これらは、地球環境をめぐる異文化間の対話をいかに実現するかという問題を志向しているのであり、その方法論については、様々な場所・立場からの模索がしばらく続くだろう。というのも、文化的枠組みを介して特定の場所で物質的世界を生きる私たちにとって地球規模で環境をとらえるのは簡単ではないからだ。まず、各文化や社会における世界観、つまり、私たちが世界にある在り方を支えている文化的枠組みが意識化されなくてはならない。さらに、アントロポセンという語が想定する種としてのヒトあるいは人類についてチャクラバルティは、概念としては理解可能かもしれないが、私たちに種としての経験の認識論的枠組みはない、とさえ述べている（“We humans never experience ourselves as a species” 220）。チャクラバルティによれば、気候変動などによって、私たちは自らの世界経験をこえて存在すると思われる（人類）全体なるものを意識させられるが、それも特殊性を包含しうるようなグローバル・アイデンティティではなく、それに頼らないポリティクスが必要だという（222）。気候変動の影響にさえ国や階級による差異が生じている現状をみれば、それもうなずける（Nixon 参照）。ここで問題になっているのは、“地球環境”や惑星レベルでの“世界”なるものにとらえ難さと向き合い、安易な普遍化や全体主義的な比喩に傾くことなく、環境問題に対する政治性を有すること

のできる“種としての人類”なるアイデンティティとはいかに可能かということであろう。

地球規模で環境を考えると文化的特殊性という問題は、エコクリティシズムでも議論されてきた。例えば、ハイザは「グローバル」がいかに表象されてきたかについて分析した著書『場所の感覚、惑星の感覚』(*Sense of Place and Sence of Planet*, 2008) で、「ブループラネット (青い惑星)」や「グローバルヴィレッジ (地球村)」、「ガイア」など 1960 年代から 1970 年代の地球についての表象が環境をめぐる政治的・文化的多様性認識の足枷になってきたと指摘する (Chapter 1)<sup>4</sup>。また、ポストコロニアル主義的視点から環境問題を考察する研究者たちは、文化的差異の観点を環境批評に取り入れることを強く主張してきた。その例としては、いわゆる第三世界の環境保護運動が北米で主流の環境保護主義やエコクリティシズム研究から長らく認知されてこなかったことを指摘したニクソンの『スロー・バイオレンスと貧しきものたちの環境保護運動』(*Slow Violence and the Environmentalism of the Poor*, 2011) や、ポストコロニアル作品における環境表象を植民地時代の負の遺産と対峙する文化的ポリティクスとして読み解いている、エリザベス・デロウグリーら (Elizabeth DeLoughrey and George B. Handley) 編著『ポストコロニアル・エコロジー』(*Postcolonial Ecologies*, 2011) などが挙げられる。

地球環境と地域的・文化的特殊性は、「グローバル／ローカル」の枠組みとともに、いかに扱われるべきであるのか。結城正美は、ハイザの 2013 年の論文に言及し、グローバルに展開する現在のエコクリティシズムに「異文化間の類似性に基づく統一原理の模索と、その逆に、文化的差異が孕む政治性や緊張関係に着目するポストコロニアリズム的潮流があると指摘されている」(vii-viii) とまとめたうえで、「文化的差異と類似性の双方を視野に入れることで脱国家的エコクリティシズムの具体的なかたちが見えてくるはずだ」(viii) と主張している。また、デロウグリーと G・B・ハンドリーがポストコロニアル・エコクリティシズムの課題として挙げているのが、差異を棚上げすること

<sup>4</sup> 芳賀による書評 (2009) も参照されたい。

も複数の問題を階層化・序列化することもなく、いかにグローバルな事象とローカルな事象について倫理的に語る方法を見つけるかという難題であるが（Introduction 25）、筆者も、国境や文化圏の枠を越えて環境問題に取り組もうとする研究者にとってそのような取り組みから得られるものは少なくないであろうと考える。なぜなら、グローバルな事象とローカルな事象は独立した現象ではないからだ。

さらに言えば、グローバルな事象とローカルな事象を関連付けて語る方法を見つけることは、既存の「グローバル／ローカル」の線引きや枠組みを異質化し流動化する可能性も秘めている。日本における具体的な文学批評の実践を考えるのであれば、「グローバル／ローカル」の感覚が日本文学でどのように表象されているか、そしてそれは、他文化で生まれた作品、例えば英語圏文学の表象とどのような類似点・相違点があるのか、について分析することができるだろう。そうすることで、私たちは自文化に宿るテンプレート、文化的枠組みを認識することができ、他文化における「グローバル／ローカル」の枠組みにも自らをひらくことができるのではないか。そのような実践のなかに、異文化間で伝わりうる「グローバル」の表象のチャンネルが生まれる可能性があるのではないだろうか。

例えば、地球規模の気候変動をグローバルな文脈とローカルな文脈で考えてみることもできるかもしれない。地球規模で気候変動が起こっていると仮に科学的データに基づき示すことができたとしても、それが違う場所、異なる層の人びとに同じような問題として、また、同じような危機感を持って受け止められるとは限らない。環境負荷をめぐる地域・階級間の不平等の問題があるだけでなく、気象現象なども異なる文化的枠組みを通して受け止められているだろうからだ。天災がある程度毎年のようにある日本列島において、気候変動はどんな条件がそろえば認知されるのであろうか。大雨や台風の被害を「未曾有の」、や「観測史上初の」、「80年ぶりの」などと形容するとき、それらのデータの解釈に妥当性があつたとしても、それぞれどのようなロジックが働き私たちの反応を規定するのだろうか。このように多様な角度から文化的枠組みと



差異を丁寧に読み解くことが、環境をめぐる異文化間対話への第一歩となるのではないかと思う。

### 終わりに

以上述べてきたように、環境人文学とエコクリティシズムとの接点には私たちの環境意識や世界観を変えるようなコンセプトと語彙の模索があり、また、例えば、日本や他の文化圏での環境をめぐる言説における「グローバル／ローカル」の比較を行うことには、異文化間で地球環境を語る枠組みの発見につながりうる可能性があるだろう。社会的・経済的・歴史的な人やモノのグローバルな移動が環境変化の要因の一つでもあるので、「アンソロポセン」や「惑星の感覚」を私たちの日常的な思考を広げるきっかけにしていく必要はある。だが、実際には、各地域における地道な社会・文化の特殊性の問い直しを通過してのみ、異文化間の環境をめぐる価値観の擦り合わせは可能となろう。どのようなテンプレートが特定の文化で機能しているか、また、文化的テンプレートはいかに伝達・変更可能なのか。グローバルな時代に特定の地域における人間と世界の関係性の枠組みを問うこと、および様々な地域のテンプレートの比較検証から得られることは、当分は多く、有意義なものであるはずだ。

\*本稿は、平成 25 年度札幌大学留学研修制度による研修成果である。研修先カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) のウルズラ・ハイザ教授にも感謝の意を表したい。

### Works Cited

- Buell, Lawrence. "Ecocriticism: Some Emerging Trends." *Qui Parle: Critical Humanities and Social Sciences* 19.2 (Spring/Summer 2011): 87-115. Print.
- Chakrabarty, Dipesh. "The Climate of History: Four Theses." *Critical Inquiry* 35 (2009): 197-222. Print.

- Crist, Eileen. "On the Poverty of Our Nomenclature." *Environmental Humanities* 3 (2013): 129-147. Web.
- DeLoughrey, Elizabeth, and George B. Handley. "Toward an Aesthetics of the Earth." Introduction. DeLoughrey and Handley, *Postcolonial Ecologies*. 3-39. Print.
- , eds. *Postcolonial Ecologies: Literatures of the Environment*. New York: Oxford UP, 2011. Print.
- Haraway, Donna J. *When Species Meet*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2008. Print.
- Heise, Ursula K. "Globality, Difference, and the International Turn in Ecocriticism," *PMLA* 128.3 (2013): 636-643. Print.
- . *Sense of Place and Sence of Planet: The Environmental Imagination of the Global*. New York: Oxford UP, 2008. Print.
- Heise, Ursula K. and Allison Carruth. "Introduction to Focus: Environmental Humanities," *American Book Review* 32.1 (November/December 2010): 3. Print.
- Nixon, Rob. *Slow Violence and the Environmentalism of the Poor*. Cambridge: Harvard UP, 2011. Print.
- Nye, David E., Linda Rugg, James Fleming, and Robert Emmett. *Background Paper: The Emergence of the Environmental Humanities*. May 2013. MISTRA: The Swedish Foundation for Strategic Environmental Research. 25 Mar. 2014. Web.
- Rose, Deborah Bird, Thom van Dooren, Matthew Chrulew, Sturtart Cooke, Matthew Kearnes, and Emily O'Gorman. "Thinking Through the Environment, Unsettling the Humanities," *Environmental Humanities* 1 (2012): 1-5. Web.
- Sörlin, Sverker. "Environmental Humanities: Why Should Biologists Interested in the Environment Take the Humanities Seriously?" *BioScience* 62.9 (2012): 788-789.
- Tsing, Anna. "Unruly Edges: Mushrooms as Companion Species." *Environmental Humanities* 1 (2012): 141-154. Web.
- 小谷一明、巴山岳人、結城正美、豊里真弓、喜納育江編著『文学から環境を考える—エコクリティシズムガイドブック』 勉誠出版、2014年。
- 豊里真弓「8. 環境人文学」小谷ほか編著『文学から環境を考える』、275 - 276 頁。
- 芳賀浩一「書評： Ursula K. Heise. *Sense of Place and Sence of Planet: The Environmental Imagination of the Global.*」『文学と環境』第 12 号、2009 年、62 - 63 頁。
- 巴山岳人「3. エコクリティシズム／環境批評」小谷ほか編著『文学から環境を考える』、265 - 266 頁。
- 結城正美「はじめに—日本のエコクリティシズム」小谷ほか編著『文学から環境を考える』、i - xiv 頁。